

「未来の木」の特徴と意義

河合可南子*・名島 潤慈

Features and Significances of the Future Tree Drawing

KAWAI Kanako*, NAJIMA Junji

(Received August 5, 2008)

キーワード：バウム、2枚法、未来の木

はじめに

バウムテストの特殊技法には、①黒色バウムと色鉛筆による色彩バウムを描かせる黒一色彩バウムテスト (名島, 1999)、②桜の木を描いてもらう“Baum-C”と木の画を模写してもらう“Baum-S” (後藤, 1975)、③枠付け空間ならびに丸枠付け空間の中にバウムを描かせる技法 (森谷, 1983・森谷ら, 1984)、④被検者に実のなる木を描かせた後、2枚目の画用紙に「木の根っこ」を描かせる技法 (中園, 1996) などがある。また、筆者 (河合, 2008) が試行した「未来の木」に関係が深いと思われるバウム2枚法の研究には次のようなものがある。

一谷ら (1985) は、被検者に鉛筆で木の絵を描いてもらい、受容的・支持的雰囲気の中でほかの心理検査や面接を行った後、やはり鉛筆でもう1枚別の木の絵を描いてもらうという「2枚実施法」を行っている。一谷らによると、検査者-被検者間の関係の深化と安定によって、2枚目のバウムには、被検者の真の姿 (real self) が投影されるという。

一方、森田 (1995) は、1枚目のバウムを描いてもらったすぐ後に、「今のとは違う木をもう1本描いてください」という教示で2枚目のバウムを描いてもらうというバウムテスト2枚法を試みている。このバウムテスト2枚法に見られる一般的な特徴としては、①1枚目には紋切型の木が描かれやすい、②つまり2枚目はより防衛が働きにくく、パーソナリティのより内的な側面が現れやすい、③バウムテスト2枚法を行うことによって、パーソナリティの立体的な把握ができ、検者の予後や将来像の手がかりが得られるということがある。

高田と森田 (1996) は、健常者26名と臨床群 (境界例と統合失調症21名) を対象として、ロールシャッハテストを用いたLandisの自我境界測度 (D%) とバウムテスト2枚法における描画特徴との関連性を検討し、その結果、自我境界の弱い群と強い群との2群間において有意差が見られた描画特徴は、1枚目のバウムよりも2枚目のほうに多く見出された。したがって、自我境界の強度を測定するには、2枚目の方がより有効であることが

*山口大学大学院東アジア研究科

わかった。

さらに野瀬（1997）は、健常群 40 名と統合失調症群 40 名の全体的印象を評定して因子分析を行った結果、「樹木エネルギー」因子において、健常群では 1 枚目と 2 枚目に因子得点の差は見られなかったが、統合失調症群では、1 枚目よりも 2 枚目のほうが有意に得点が低いことを見出した。

これらの方法は、バウムテストを 2 枚法や 3 枚法で施行することによって、パーソナリティのより重層的な理解を得ようとするものであろう。このことは、Koch（1952）によっても「再テストを繰り返すことで、われわれは、より深層に到達することができ、かつ同一被験者のいろいろな層を次々ととらえることができる」と言及されている。

筆者の考案した「未来の木」（河合，2008）も特殊技法の一つである。筆者は、はじめ自分の未来が見えず漠然としたものを抱えながら過ごしている学生に、自分の未来に何か少しでも希望を見出して前を見てほしいという願いから「未来の木」という方法を考えた。鶴田（2005）はバウムテストの変法を、①教示を変えるもの、②教示を変えて複数回施行するもの、③条件を変えて複数回施行するものの 3 つに分けているが、バウムテスト「未来の木」は、鶴田のいう②になろう。本稿では、この「未来の木」の持つ特徴と意義について事例も交えながら吟味することにする。

1. 「未来の木」の紹介

1-1 「未来の木」の施行方法

まず、A4 版の用紙（縦長に使用）と HB の鉛筆を用意する。一般的なバウムテストでは 4B の鉛筆が使われているようだが、ここではより身近に使われていると思われる HB の鉛筆を使用している。ここでは、その施行方法を描画段階と描画後質問段階に分けて説明する。まず描画段階において、検査協力者にく「実のなる木を一本描いてください」と教示し、通常のバウムテストを行う。そのすぐ後にく「では、この木の未来を描いてください」と教示し「未来の木」を描いてもらう。描画に対して抵抗のある被検者にはく「絵のうまい、下手は全く関係ありません」と付け加える。

次に描画後質問段階である。2 枚の描画終了後にく「木は、あなた自身を表すといわれています」と検査協力者に伝えた上で、次の 4 つの質問について答えてもらう。

Q1 くこの木とこの木の未来の違いは何だと思えますか？>

Q2 くそれは現実のあなたにとって何にあたると思えますか？>

Q3a くこの木が（「未来の木」のように）成長するために必要なものは何だと思えますか？>

Q3b くこの木が、この「未来の木」のようにならないために必要なものは、何だと思えますか？>

Q4 くそれは現実のあなた自身にとっては何になりますか？>

Q3 には 2 つのパターンがある。検査協力者の「未来の木」が実際に大きく成長して描かれている場合、もしくは変化が無いように見えても、検査協力者の「成長している」とか「プラスの変化である」という内容の言葉がある場合は、くこの木が（「未来の木」のよう

に) 成長するために必要なものは何だと思いませんか? > (Q3a) と質問する。検査協力者にとって「未来の木」への変化がマイナスの意味である場合は、<では、この木が(1枚目のバウムを指して)この「未来の木」のようにならないために、何が必要ですか? >という質問の仕方になる。

検査者は、この4つの質問を行い、検査協力者がイメージを膨らませて絵に自分の未来を投影していく手助けをする。2枚のバウムを利用して、自己を振り返ることによって、検査協力者は自分の現在の状況と未来像を整理し、に自分の未来やそのための課題について考えることができると思われる。

1-2 描画後質問の意味

描画後質問のQ2・Q4は、名島(2003)の夢分析をする際に用いられる特殊介入のなかの抽象性質問を参考にしている。この抽象性質問は夢のなかの質的・抽象的な側面について問う質問である。名島(2003)によると、この抽象性質問には、①質問の内容は、質的・抽象的な側面を抽出質問するので、質的・抽象的である、②質問の形式は、質問の最初に必ずくあなたにとって>という言葉置くので、収束的・求心的である、③質問の効果は、深層的・個別的・自我関与的な連想を引き起こしやすいといった特徴がある。

「未来の木」での質問は、Q1で視覚的または検査協力者の主観的な立場で1枚目と2枚目の違いを言語化する。そしてQ1の答えが視覚的に描画で確認できるものであれば、検査協力者の主観によった抽象的なものであればQ2では、その2本の木の違いを検査協力者の未来というまだ見ぬ世界へ付与させる。Q3で、また1枚目の描画に戻るが、今度は木の立場に立ってその木が未来に向けて必要としているものは何であるかをたずねる。Q4ではQ3で明らかになった、木が今必要としていることを、今度は今の検査協力者自身の立場で考えてみる。ここで通常のバウムを今現在の木として捉えているが、検査協力者がく実のなる木を1本描いてください>という教示の下で、過去や未来のある時点での木を連想し描くということは考えにくいためである。

これらの4つの質問でなくとも通常のバウムにおいて自然になされる描画後のやりとりによって検査協力者の持つイメージが現れ、検査者がそれを共有するといったことも考えられよう。しかし、これら4つの質問は、現在から未来へと時制が移り変わるという要素と、紙面に置いたバウムから今の自分へ移り変わるという要素を含んでいる。そしてその2つの要素が重なった時の3つ目の要素も質問過程で出現するのである。これらは、あたかも、XYZ軸からなる立体的な図形を構築していく過程のようである。現在から未来へという時制のX軸、木から検査協力者へというY軸、未来に向けて今の木が必要としていることを連想した上で、それを自分自身にあてはめていくというZ軸となり、検査協力者が持つ今の自分のイメージを通して立体的に未来の自分のイメージを捉えていく。

その過程のなかでは、検査協力者にとっての今の課題が明白になりやすいということがある。つまり、検査協力者の未来に向けての現在の課題を検査協力者自身が意識できるようになると考えられる。

1-3 方法か技法かの問題

鶴田(2005)は皆藤章の『風景構成法のとくと語り』を引用してバウムテストを検査・方法・技法とに区別する視点を提示している。皆藤によると「得られた結果を検査にかか

わった両者の『関係』が反映されているものとして引き受ける」姿勢がきわめて大切であるという。この「関係」という視点から見ると、施行側の何らかの要因で、たとえば他の結果と比較するために必要な結果を得る目的のために定まった手続きに従う場合、投映法は「方法」として機能しようとする。一方、得られる結果よりも場面に起こり得るあらゆる生きた体験（施行を中止することも含めた）や手応えを大切にしながら、クライアントの痛みや苦悩を「全人的に」知ろうとするとき、その投映法は「技法」として機能しようとする。検査・方法・技法の関係は、検査に向かうほど科学性は重視されており、技法に向かうにつれ検査者と検査協力者との関係が重視されるといった傾向は、「投映法それ自体が持つ特徴よりも、むしろ施行する側の姿勢により強く反映される」と述べられる。

それでは、この「未来の木」は検査・方法・技法のどれに位置するのであろうか。「未来の木」は、1枚目は通常のバウムテストを行う。そして2枚目に1枚目の未来像を描いてもらう。その作業で終わってれば、これは「方法」に属しているといえる。鶴田（2005）は施行法を変化させることについて、「私はあなたに違う働きかけをします。あなたは今度はどうな反応を私に見せてくれますか？」という問いを投げかけ、それに対する応えを受け取るというかわかりが反映しているものとしてバウムに関わるということだとする。鶴田（2005）は「新法・変法の施行には特にそうした課題性や関係性を意識したバウムとのかかわりが前面に感じられる」という意味で、それらを「方法」に区分している。

一方で「未来の木」は2枚のバウム描画後に質問をする。この質問の意図の一つは検査協力者の「未来の木」、しいては未来の自分のイメージを沸きやすくさせるということにある。また、質問をしていくことで検査者も検査協力者が持つ未来の木、検査協力者自身の未来のイメージを共有しやすくなる。これは「方法」として課題を統制するという意味だけでなく、「未来の木」を施行することで生まれる体験を検査者がともに生きようとするためには必要なことだと考えている。

「未来の木」という方法は4つの質問だけでなくその場に応じた会話も含む。そのため、検査者と検査協力者との関係を含んだ、その場で生まれる体験をともに生きようとする筆者の姿勢はあると思っている。その点を踏まえると、ここでは方法か技法か、はたまた検査かという疑問は解答を見出せない。しいていうならば、やり方は方法であるが姿勢は技法側でいたいと思っているのである。区別がつかないという曖昧さの一因は、筆者のこの方法を行う上での姿勢の曖昧さにあるのかもしれない。しかし、鶴田（2005）は「検査・方法・技法そして療法（表現療法・芸術療法）がすべてそれぞれの特徴・意義を持って提示され、それを享受できる時代においてこそ、いかなる臨床場面においてもそれらすべてを明確に区別しながら内包するようなパラダイムが可能となるのではないか」と述べている。その曖昧さを筆者のなかでどう区別し、どう抱えていくのかということが、これからの「未来の木」の課題であるといえよう。

1-4 1枚目のバウムと比較する対象の違い

これまでのバウムの特殊技法と「未来の木」は、おおよそ基本のバウムと何かを比較するという点は同じである。しかし、その比較をする対象を考えると、これまでの特殊技法と「未来の木」では違いがあることが分かる。たとえば、一谷ら（1985）の「2枚実施法」は1枚目の後、検査者—検査協力者の関係の深化を図りつつ、面接の最後に別の木を描くように教示をしている。そのため、1枚目と2枚目のバウムは違う木である。1枚目

と2枚目のバウムの違いは、検査者と検査協力者との関係性の違いによってパーソナリティの違う側面が表出した、または両者の関係性がバウムに作用したといえる。

「未来の木」では、1枚目と比較をする対象が同じ木であるという点でこれまでの特殊技法と違うといえる。つまり、「未来の木」では同じ木であるが、時制を現在から未来へと移動させることによる違いを見ていくのである。それは、今現在の状態と、目線を少しあげて前を見つめ、未来に思いを馳せたときに見えてくる未来のイメージとの違いである。前述した中園（1996）の、検査協力者に実のなる木を描かせた後、2枚目の画用紙に「木の根っこ」を描かせる方法は、同じ木が比較する対象であるということ共通するものがあるといえよう。しかし、ここでも比較するのは木のある部分をピックアップしたものであり、時制の違いというのは無関係である。「未来の木」では、検査協力者がまだ見ぬ未来のイメージをどう取り扱うかということが課題となるのである。

2. 「未来の木」を適用した事例を通しての吟味

本稿で取り上げるのは、「未来の木」を適用した25歳の女性Aである。この事例について筆者（河合，2008）はすでに取り上げたこともあるが、もう一度詳細を吟味する。Aに「未来の木」を施行したときは、彼女は1か月後に卒業を控えた課題を仕上げるために忙しくしている時期であった。

2-1 Aの描いた2枚のバウム

まず、Aに「実のなる木を1本描いてください」と教示し通常のパウムを描いてもらった。そのすぐ後、今度は「この木の未来を描いてください」と教示し「未来の木」を描いてもらった。教示をすると、どちらのときもあまり戸惑うことなくすぐに描き始めた。2枚のパウムの様子は次のとおりである。

Aの描いた1枚目のバウムは、勢いよく紙面いっぱい描かれ、今にもはみ出しそうである。根は地面にしっかりと這っていて、地面は根の少し上に水平線で描かれている。地中は右上から左下への薄い斜線で表現されている。幹は太くどっしりとしており、右側のほうがなだらかな曲線を描きながら太くなっているため少し左に傾いているような感じを受ける。幹の先端は4つに分化して描かれている。樹冠はアーケード型で、そのなかには木の大きさからいうと大きすぎるほどのリンゴの実がぎっしりと埋め尽くすようになっている。そして、紙面の右上端には太陽が描かれて、そこから木に向けて燦々と陽が降り注いでいる。全体的にどっしりとした安定感が感じられるが、樹冠を埋め尽くすようになっている実が重そうである。樹冠の下側は実があるせいか、少し垂れ下がっている。

2枚目の「未来の木」は、1枚目と比べてさらに大きくどっしりと描かれる。紙面の左上右から少しはみ出している。まさに収まりきらないといった感じである。幹はさらに太くなり根も数は減っているが太くなっている。その根は、さらに地中深くはり、そのことを強調するように地面は1枚目より少し上に水平線で描かれる。地中の処理は1枚目と同じように斜線で行われている。幹先端は1枚目では一筆書きで一気に描かれたが、2枚目では左の幹を描き終わって少し手を休めてから一気に右側の根の始まりへと続く。左端の根は途中で少し膨らみがあり、先端が見えないまま紙面の左端へとはみ出している。幹先端は1枚目と比べより高いところに描かれ樹冠にもより深く包まれている感じを受ける。樹

冠は1枚目と比べてよりなだらかな柔らかい線で描かれているが、紙面いっぱいに描こうとするあまり少し四角い形になっている。そして太陽は見えないが、陽の光のキラキラとした感じをダイヤのような形のもので樹冠の周りにちりばめており、そこには暖かい陽の光と、それを反射してきらめいている葉の存在が伺える。

2-2 Aの描画後に行った4つの質問

2枚のバウムを描いてもらったあと、筆者はAに次の4つの質問を行った。

Q1<この木とこの木の未来の違いは何だと思いますか？>

Q2<それは現実のあなたにとって何にあたると思いますか？>

Q3<この木が（「未来の木」のように）成長するために必要なものは何だと思いますか？>

Q4<それは現実のあなた自身にとっては何になりますか？>

Q1<この木とこの木の未来の違いは何だと思いますか？>に対してAは1枚目では実にすべて栄養がいつているが、未来では実よりも木自身にその栄養が使われるというふうにご答える。次にQ2<それは現実のあなたにとって何にあたると思いますか？>と聞くと、「実が今取り組んでいる課題かもしれない」といい、「未来ではその課題は終わり、今度は自分が社会に出たりするために、自分自身が成長していかないと」という。またAは1枚目で太陽を描いたことについて、「1枚目では木が太陽の光で栄養をもらっている」と話す。しかし、2枚目では根を意識的に太く描いたという。それは、2枚目の「未来の木」が地中から栄養をもらっているかららしい。「こっち（1枚目）は先生とか、親とかまだそういうものをもらっているのかもしれない。こっち（2枚目）は自分でしないと。能力を伸ばすためにも、力量をあげるためにも自分が輝いていくためにも、自分でやらんとね、みたいな感じ」という。

ここでAにとっての自分の成長について聞くと、「経験や情報を自分の中に蓄積させて自分のものにし、それを実際にできるようになるよう能力があがっていくこと」と答える。また、話をしていくうちに、Aが自分のことを融通の利かない人間だと思っているということが明らかになり、Aは「教科書から得た知識をうまく組み合わせ、その場の状況に融通を利かせて使っていくこと」が自分の成長だと語った。

Q3<この木が（「未来の木」のように）成長するために必要なものは何だと思いますか？>との質問をすると、Aは「とりあえず実をならせるという作業を終えること」と答える。筆者にはそれが、何か具体的な事物ではなく、過程のように思われたため詳しく聞いてみると、Aは「木の土台をしっかりとさせることや、実をならせるために十分な時間をとる」ことだと答えた。そして、その過程においてAが重要視しているのは、流れ・順序であるということが分かった。その順序というのは、「先に実をならせ、実がなくなってから今度は土台を大きくし、そこから木全体が大きくなる」順番のことである。つまり、「今は実をならせることをしっかりとさせ、受け口を大きくし、いろいろなものを自分が得ることができるような器を作っていくこと」が大事だという。

そして、Q4<それは現実のあなた自身にとっては何になりますか？>と最後の質問をすると、Aは「成長の過程、人生の過程」と答え、「実をならせるためにも準備が必要だし、

それが終わったら身体だったり能力だったりを大きくして、また次に実をならせてという繰り返し」のことだと答えた。

2-3 Aについての考察

Aは、木の未来や必要なものである順序について語っていく上で、自分の性格を振り返り、自分は必ず成長できるという確信を持っているという。そこに不安はなく、成長の過程を繰り返していくことができれば、必ず成長できると信じている。しかし、実をならせるための根は吸収できる状態なのかと聞いてみると、「そうしないといけないと意識している」と答える。話のなかでAは、人からの指導や意見の全てを素直に受け入れきれてはならず、「むっとしてしまうこともある」という。それでも後になって冷静さを取り戻した時に、自分の頭のなかで有益な情報は取り入れて利用しようとしており、自分が向上するための食欲さのようなものを持っている。その向上への食欲さは、彼女がただひたすらに自分を信じ、向上への意欲をかき立たせているということなのだろう。

1枚目でAは、とまどいなく一気に幹から幹先端を描きあげた。これは山川（2005）のいう「幹の分化と包幹を同時に行っている」ことに相当する。伸ばしていくと同時に着地点を考えながら描いているのである。これは、幹先端を独特の形で解決しているのであり、「自分でエネルギーをだしながら、同時にそれを引き取るという、ある意味自己完結的な、ある意味完成された姿」を映し出している。そこから、Aのいつでも自分の得られるものを吸収してそれを生かしていきたいという気持ち、またそうせずにはいられない完璧主義的な頑固さのようなものを感じる。描画に向かうAの姿勢からも感じられたことであり、彼女はまっすぐに紙面を見つめ、これしかないという自分のなかで決まった形を描いている感じを受けた。そのおかげで、Aは揺らぐことなくまっすぐと前を見て歩き続けることができるのだともいえる。

筆者は、人からの指導や意見を素直に受け入れられないが、後に考え直して批判をも生かそうとするAの姿勢について、「それもAの描いた1枚目から2枚目への小さな変化の流れの1つなのかもしれないね」というと、Aは「ああ、そうかもしれない」と納得したようにうなずいた。そして、自分の成長を促すためにも、最初はむっとするかもしれないが、人からの指導や意見を受け入れていこうとしているということが語られた。

このように、描画を媒介とした質問や語りによって、Aの持つ今現在の課題のようなものが明らかになった。また絵を媒介として「あえて自分でああなのか、こうなのかと考えるという作業をすることになるから、自分のなかの大切にしていることを整理することにもなった」ようだ。それは、Aにとっては成長をするための各段階がきちんとした順序で、一つ一つ確実に自分のものになっていくということ、また、それを繰り返していくということである。そのことに気づき、Aは「ああ、私は今この段階なのだ」と自分で納得することができ、次の成長段階に向けて必要以上に焦る必要がないということにも気づくことができた。

ちなみに、その約半年後Aと話をする機会があった。Aは「未来の木」を体験してしばらくたってから、自分で木を1本描いてみたところ、それは実が落ちている木であったという。そして、自分はおそらく次の段階に進んでいるのだということが語られた。Aの言うとおりであるとすれば、Aの描いたその後のバウムは、上記の1枚目と「未来の木」の間を示している。つまり、実際にバウムは2枚目に描いた「未来」に向かって変化してい

るわけである。Aの木は上記の1枚目のバウムでこぼれるほどなっていた実が落ち、今度は実ではなく木自身に栄養が注がれるという、成長の次の過程に入ったということなのであろう。

3. 「未来の木」の特徴と意義

これまで、事例もあげながら「未来の木」について吟味してきた。「未来の木」の特徴としては、①「未来」の木という題材、②描画後の4つの質問、③描画の媒介という3点があるが(河合, 2008)、本稿ではこれら以外の「未来の木」の特徴と意義について述べたい。

まず、「未来の木」の特徴としていえるのは、バウム2枚法に質問を取り入れた方法であるということがある。この質問は検査協力者のイメージをバウムから検査協力者自身、現在から未来へと飛ばす。この飛躍は一見現実との比較をするのにあたりまえすぎて検査協力者に質問に対して事前に構えを用意させてしまいそうである。しかし、たとえ「そう来ると思った」と言われることになっても、質問をしていくうちに検査協力者は自分の今抱えている課題を意識し始めるのである。

「未来の木」を施行することは、2枚目の「未来の木」に自分の未来のイメージを投射し新しく自己を発見する手助けをするのはもちろんであるが、「未来」を見据えるからこそ見えてくる「今」があるように思える。2章で取り上げた事例Aの場合は、「あえて自分でああなのか、こうなのかと考えるという作業をすることになるから、自分のなかの大切にしていることを整理することにもなった」というAの言葉のように、ぼんやりしていたことが、すんとあるべき所に収まるような体験があった。Aにとって、成長をするための各段階のきちんとした順序が大事であり、一つ一つ確実に自分のものになっていくことの繰り返しであるということにA自身が気づくことができたのである。「未来」のイメージあつての現在を感じることで、今生きている自分をより深く見つめることができるということなのではないだろうか。

Aの事例とは違って「未来の木」が1枚目のバウムと比べ、成長せずに枯れていたりおおよそ成長しているとは言いがたい場合であったとしても、検査協力者はそこに新しい自己を発見したり、何らかの希望を見出したり、取り組むべき課題を自覚したりするのである(河合, 2008)。

また、「未来の木」の特徴として1-4でも示したとおり、1枚目の通常のパウムと比較をするものが、検査協力者の描いた1枚目のバウムを利用し、1枚目で描いたバウムの未来の姿であるということがあげられる。これまでにあったバウムの特殊技法のように1枚目と全く違うバウムと比較するのではなく、同じ木における時系列の違いで比較を行うということが、何を示すのかは今の時点でははっきりとはいえない。しかし、今後の研究課題として取り組んでいきたいと考えているところである。

また、事例Aの場合、1枚目のバウムと2枚目に描いた「未来の木」の間にあたるバウムは「未来の木」への着実な変化の段階を示していた。この点は、非常に興味深いところである。このことは、「未来の木」を施行することで検査協力者が自分の未来像を垣間見ることができるという可能性を示している。

おわりに

鶴田 (2005) は科学においては排除される情報間の「ずれ」が新しさや意外性であったり見えない将来を予見するものであったりするという。「未来の木」を施行して感じるのは、1枚目の通常のバウムと2枚目の「未来の木」との違いが実際の検査協力者の姿とどう関係しているのかということ、またその「ずれ」が検査協力者の現在と未来にどのように関係しているのか、ということである。また、比較をする対象が同じ木であるということが、どのように検査協力者の内面に作用しているのかということを経験課題とした。

文献

- 青木健次 (1977) バウムテストにおけるバウム・イメージの多様性を測る. 心理測定ジャーナル, 13, 19-23.
- 千原雅代 (2005) 象徴的表現としてのバウムテスト. 山中康裕・皆藤 章・角野善宏編著, バウムの心理臨床. 創元社, 328-337.
- 後藤佳珠 (1975) 臨床場面に適用した“Baum Test” (I) 新しい技法“Baum-C” “Bum-S”を加えて. 芸術療法, 6, 53-62.
- 一谷 彊・津田浩一・山下真理子・村澤孝子 (1985) バウムテストの基礎的研究 [I] — いわゆる「2枚実施法」の検討. 京都大学紀要, Ser, A, 67, 17-30.
- 河合可南子 (2008) バウムテスト2枚法における「未来の木」の試み. 山口大学教育学研究科修士論文.
- 岸本寛史 (2005) 『バウムテスト第三版』におけるコッホの精神. 山中康裕・皆藤 章・角野善宏編著, バウムの心理臨床, 創元社, 31-54.
- Koch, C (1952) The Tree Test: The Tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis. Hans Hüber, Bern. (林 勝造, 国吉政一, 一谷 彊訳, 1970, バウム・テスト—樹木画による人格診断法, 日本文化科学社)
- 森田裕司 (1995) バウムテスト2枚法の有効性に関する考察—臨床経験による検討. 中国四国心理学会論文集, 28, 90.
- 森谷寛之 (1983) 枠づけ効果に関する実験的研究—バウム・テストを利用して. 教育心理学研究, 31, 53-58.
- 森谷寛之・森 省二・大原 貢 (1984) バウム・テストにおける枠づけ効果—症例研究. 心理臨床学研究, 14, 73-81.
- 村瀬 学 (2001) 哲学の木. 平凡社.
- 中園正身 (1996) 一変法としての樹木画法の研究—根を強調した教示法の導入について. 心理臨床学研究, 14(2), 197-206.
- 名島潤慈 (1999) 黒—色彩バウムテストの解釈. 熊本大学教育実践研究, 16, 61-65.
- 名島潤慈・原田則代・横田周三・森田裕司・増田勝幸・植村孝子 (2001) バウムテスト. 上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック 第2版, 西村書店, 186-197.
- 名島潤慈 (2003) 臨床場面における夢の利用—能動的夢分析. 誠信書房.
- 仁里文美 (1994) 「木」のテスト指標とその意味. 山中康裕・岡田康伸編, 身体像とこころ

の癒し，岩崎学術出版社，159-164.

野瀬祥代（1997）バウムテスト 2 枚法における全体印象の差異に関する一研究—SD 法による因子分析を用いて．中国四国心理学会論文集，30，76.

高田晃治・森田裕司（1996）バウムテスト 2 枚法を用いた自我境界の測定．中国四国心理学会論文集，29，90.

鶴田英也（2005）本研究の目的と位置づけ—バウムとの関わりの諸相．山中康裕・皆藤章・角野善宏編著，バウムの心理臨床，創元社，152-181.

山川裕樹（2005）幹先端処理の重要性．山中康裕・皆藤章・角野善宏編著，バウムの心理臨床，創元社，222-238.